様式２　**令和３年度　清瀬市立　清瀬第三小学校　学校評価表**　後期　２月15日・学校運営連絡協議会資料

学校教育目標

〇よく考えやりぬく子ども（重点目標）〇やさしく思いやりのある子ども〇明るく元気な子ども

目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】　地域の風が行き交う学校　◎「共に学んでよかった、明日も学びたい」といえる学
【目指す児童・生徒像】　他者と協働して主体的に問題を解決しようとする子ども
【目指す教師像】　◎進んで学び合い、責任をもって教育活動を遂行する教師　・児童一人一人と信頼関係を築き、個々のよさを引き出す教師　・保護者や地域と連携する教師

育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動

【育成を目指す資質・能力】
「協働問題解決能力」
〇基礎的な力（言語、数量、情報スキル）
〇他者と共に考える力（協働問題解決力、メタ認知）
〇他者と共生できる力（人間関係形成力）
〇社会の中で実践する力（社会参画力、自律的活動力）

【特色ある教育活動】
重点１　「協働問題解決能力」を中心に学力の向上を図る
重点２　他者と共生できる豊かな人間性を育む
重点３　「協働問題解決能力」を育む学校支援本部の活動を保障し、地域に開かれた学校づくりを推進する。

前年度までの学校経営上の成果と課

・「誰にでも分かる授業づくり」の視点で三小スタンダードをもとに指導や教室環境の整備を充実させることができた。協働問題解決能力の向上をめざし、校内研究では国語の「書くこと」について研究に取組み始めた。体験学習など学校支援本部の支援による教育活動もさらに充実してきた。課題としては、校内研究での昨年の成果を基に、「自分の思いや考えをもち、書くことで表現する力」を伸ばしていくことである。思いや考えをもつためには、学校支援本部をはじめとする保護者・地域や専門家の方々と連携し体験活動を積み重ねさせる中で、教育活動全体を通して基礎的なスキル、思考力・判断力・表現力、人間関係形成力、社会的実践力などの力を意図的・計画的に育むことに取り組む。また、地域の防災活動に倣って、今年度は児童の防災意識を高める活動を計画する。

柱	具体的方策	自己評価 評価 取組指標	自己評価 評価 成果指標	自己評価 課題及び次年度以降の改善方策（案）	学校関係者評価 学校関係者による「自己評価」についての評価	次年度以降の改善方策 学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策
確かな学力の向上	1時間の学習展開の中で全員が自分の考えを表現する場面を作り、全員参加の授業をつくる。 一人1台端末を活用し、授業改善を図る。	4	4	低学年では、技能面の課題により、ペア学習の際に自分の考えを表現できない児童がいた。また、学年を問わず、発言に消極的な児童もいるが、一人一台端末のジャムボードやスライド等の機能を活用することで、全体の場で発表する自信がない児童でも考えを表現し、それをみんなで共有することができた。端末の有効活用が、児童の意欲付けや主体的な学習へと繋がってきている。	・対面であれば児童の表情・様子から意見がありそうだな、など気づくことができるが、オンラインだと難しさがあるのではないか。その中で端末を有効活用して多様な表現方法（ジャムボードやスライドなどの機能）で児童の参加を促す取り組みはとても評価できる。表現や発表は口頭だけではなく色々な方法があっていい。このような取り組みは児童が自分の考えを伝え共有する喜びに繋がっていく。 ・参加の形は発表だけではない。聞いているだけの人、うなづく人、拍手する人など、その場を構成する全員が参加者なので、児童がそれを感じられる声かけも重要。	〇今年度取り組んだGIGA端末の利用について、さらに工夫し活用の幅を広げ、1時間の学習展開の中で、児童が互いの考えを共有し合い、学習を深めるための指導の工夫を図る。 〇評価の際、発言だけでなく、聞き方や他の表現方法についても評価し、児童に伝えていくよう工夫していく。
	どの子もすすんで書きたくなる課題づくりやグループ学習の方法を工夫し、考えを広げたり深めたりできる授業をつくる。	3	4	課題提示の工夫などが児童の書く意欲に繋がり、書くことへの苦手感も小さくなりつつある。低学年では、課題に積極的に取り組める児童と、課題把握に支援を要する児童とに二極化している様子が見られたが、個に応じた支援を行ったり、グループでの教え合いを行ったりすることで、どの児童も課題に向き合うことができた。よい記述や発言はみんなで取り上げながら、さらに全体の学びを深め、考えを広げられるようにしていく。	・書くことや課題への取り組みの苦手さには、間違えたくない・失敗したくないなどの思いもあるのではないか。 ・どの児童も課題に取り組めるように、個別支援やグループ学習などの工夫をしていることはとても評価できる。評価される場（正解・不正解）ではなく、書くこと学ぶことが楽しいと思える場に繋がるのではないか。	〇引き続き校内研究を通して、語彙の獲得や表現力の向上を目指し、課題づくりやグループ学習の方法を工夫することで、考えを広げたり深めたりできる授業の改善を図る。
豊かな心の育成	「挨拶と返事」が確実に身につくように、学年・学級で工夫して取り組む。 児童会での取組みを強化し、児童が自分から挨拶できるよう意識の向上を図る。 PTAと連携し家庭での挨拶の習慣化を図る。	3	3	・挨拶ができる児童が増えてきた。 ・毎朝の健康観察を通して、挨拶が ・修学旅行や運動会などの行事では、周りの人への感謝を込めて挨拶をすることの大切さを指導できた。 ・挨拶する場面やタイミングについて学ばせ、担任以外の教員や来校者に対しても、自分から進んで挨拶ができるように引き続き指導を行っていく。 ・学校だけでなく、家庭での実践も必要である	・成果指標は3ということだが、学校ではよく取り組んでくれている。家庭・地域での取り組みが一体とならないと難しい。子ども達が挨拶しやすくなるような工夫があってもいい。例えばパトロールの方にはネームプレートなどを用意する等。挨拶の前に「〇〇さんおはようございます」と名前が入ることで親しみや交流も促すことができるのではないか。	〇児童会を中心とした「やまびこ週間」（挨拶運動）を引き続き取り組むと共に、保護者との連携をさらに図り、「挨拶と返事」が確実に身につくように取り組む。 〇定期的に挨拶について児童が振り返る機会を設け、児童が自主的に挨拶する習慣を身に付けられるよう、取り組む。
	どの子も学級に居場所があるように、いじめ未然防止の取組を学年毎に工夫して行う。（3年以上は年2回のアセスを実施し、検証する）	4	3	・帰りの会の振り返りなどで、互いの良いところを伝え合うことで、児童同士でも認め合えるようになってきた。・道徳の年間計画に位置付け、計画的に指導することができた。 ・嫌なことがあったらすぐに伝えられる児童が増え、学級活動などで話し合うことができた。問題を解決させることで児童に安心感を与えられる学級づくりを行っていく。 ・アンケートやアセスも活用し、いじめ未然防止はできている。ただし、アンケートだけで把握できないこともあるため常に児童の様子を見ていく必要がある。 ・不登校気味の児童については、家庭との連携を図りながら対応していく。	・いじめの未然防止や嫌なことがあったら伝えられるようにする為には、普段の学級内の雰囲気（授業以外の）や、大人との関係性が大切だろう。日常的な何気ない会話から児童同士の関係性や家庭の様子が垣間見れたり、先生との良い時間・やり取りの積み重ねが、この人なら助けを求められるという信頼感に繋がるが、コロナ禍でそういった時間も制限されているのではないか。意識してそういった時間を持てるよう工夫が出来ると良い。SCさんについても「何かあったら」ではなく、それができるような関係性が事前に作れると良いので、全員面接などの取り組みは評価できる。	〇アセスやふれあい月間のアンケート結果を分析し、どの子も学級に居場所があるか把握したうえで、いじめ未然防止の取組を推進していく。 〇引き続き、週1度行う校内委員会や生活指導連絡会を通じて、学級学年の状況を共通理解し、学校全体で児童一人一人をみて支援していく。
健やかな体の育成	体力向上旬間の取組では、個人や学級毎に目標数値を掲げて取り組む。	3	3	新型コロナウイルス感染症の影響で、体力向上旬間の取り組みは、当初の予定よりも縮小されたが、各自、設定した目標達成に向かって、出来る範囲で取り組みを続けることができた。	・体育の授業としての運動は苦手意識のある児童もいる。生活や遊びの中で体を動かす習慣ができるといい。授業の終わりに必ずストレッチや伸びを入れるなど工夫するとよい。 ・自分の体を自分で作る・守る・整えていくという感覚を身に付けることが大切。 ・授業や家庭内での健康教育と、体力向上旬間の取組をリンクし、日常的に児童が楽しく運動に取り組む工夫（スタンプカードなど）が学校や家庭でできるといい。地域で、児童が目的意識を持って取り組めるイベントが実施できるとよい。	〇コロナ禍でも感染症対策を図りながら、体育の時間だけでなく、休み時間の運動量確保や体力向上（なわとび・持久走など）旬間の工夫、地域との連携などの工夫を行う。 〇体力テストの結果をもとに、個人や学級毎に目標数値を掲げて取り組む。
	「早寝早起き朝ごはん」点検の結果等を使って、児童と保護者に対して生活習慣への啓発を工夫して行う。	4	3	保護者会や学年だよりで周知をした。ほとんどの家庭では気を付けてくれているが、中には意識の低い家庭もあり、朝ごはんを食べずに学校に来る児童もいる。また、ネットゲームの影響もあり、寝る時刻が遅く、朝早く起きるのを苦手とする児童がいるので、タブレットを使う際の体への負担等を意識しながら使用するように家庭と一緒に取り組む必要がある。さらに感染症予防対策としても規則正しい生活習慣が身につくよう、次年度も引き続き保護者及び児童への啓発を行っていく必要がある。	・学校では、生活リズム点検の実施やプリントの配布などの啓発を積極的におこなっていると評価できる。家庭の事情や親の意識が大きいだろう。学校があることで生活が整っている児童もいるので、学校に行けるということは大きな価値。今後また休校になるような事態が起きた場合、地域や福祉と連携してそういった児童にはフォローが必要。 ・一人1台端末を活かして、児童の放課後の時間の充実を図ることで、ゲーム以外の楽しみができるのではないか。例えば、大人が入った安全な場という前提で三小児童のオンライン交流の時間、オンラインを使用した地域の人の講座など。	〇引き続き「早寝早起き朝ごはん」点検の結果等を使って、児童と保護者に対して生活習慣への啓発を工夫して行うと共に、PTAや地域関係機関と連携を図り、講演会等の機会を設ける。
特別支援教育の充実	週1回の校内委員会・年3回以上の研修会を実施し、個別支援の必要な児童についての共通理解を図り、指導・支援の方法を共有し、指導に当たる。	4	4	個別支援を要する児童について、日頃からきらり担任やスクールカウンセラーと情報交換をしている。個々の様子について次年度の引継ぎや中学への引継ぎをしていく必要がある。	・自己評価通り、よく取り組んでいると評価できる。	〇引き続き、週1回の校内委員会、生活指導連絡会、年2回の生活指導全体会、年3回以上の研修会を実施し、個別支援の必要な児童についての共通理解を図り、指導・支援の方法を共有し、組織で指導に当たっていく。
	保護者会の際に特別支援コーディネーターによる説明や資料提供を行う。	3	3	きらりだよりや三小スタンダードのに関心をもち、目を通して頂けるよう、担任からも積極的に発信していく必要がある。	・きらりの先生方がお話しに来てくれたり、きらりだよりを発行してくれたりよく取り組んでいると評価できる。ただ、関心が高い保護者を除いてはまだまだ「分からない」状態であり、分からないことが不安に繋がる場合もある。国として特別支援教育はスタンダードな情報にしていかねばならない。 ・来年度は保護者主体の講演会の実施などを行い理解が深められるといい。	〇今年度、保護者会での情報提供ができにくい状況であった。次年度は、今年度の取組に加え、学校便りでの情報提供やPTAと連携し講演会を計画するなど、特別支援教育の理解を促す機会を増やす。
本校の特色	感染症対策を図った上で、異学年交流を図ると共に、学年ごとに地域や保護者等との参画型授業・出前授業等を計画的に工夫して行う。	4	4	・町たんけんやオンラインの授業を通して、地域の人々との関わりをもてている。今後もコロナの感染状況を見ながら出前授業を計画していきたい。また、異学年交流も目的をもって行うことができた。今後も感染症対策を行いながら、異学年交流をしていく。 ・今年は昨年度よりも学校行事を行うことができたため、運動会や委員会、展覧会の兄弟学年による鑑賞等を通して、高学年としてのリーダー性を発揮させることができた。今後もリーダー性を発揮できる場を設定していきたい。	・制限のある中で、どうすれば可能かを考えできる限り取り組んでいただいたと評価できる。そのような学校の考えや取組の過程が、学校運営協議会の場だけではなく一般の保護者にもより伝わりやすいよう、取り組みの発信についてPTAでも協力したい。たくさんの人が学校に関わっているが、児童のアンケート結果にはそれがあまり反映されていないので、地域の人を知ってもらう取組を支援本部やPTAで行えると良いのではないか。	〇今年度同様、感染症対策を図った上で、異学年交流を図ると共に、学年ごとに地域や保護者等との参画型授業・出前授業等を計画的に工夫して行う。 〇学校支援本部の協力を仰ぎ、児童や保護者に取組の意図や成果をわかりやすく伝える工夫を行っていく。
	読書への興味を高める取り組みを、学期毎・学年毎に計画して実施する。計画的に俳句作品の掲示や発信を行う。	4	4	・読書旬間中は特に意識を高めていた児童が多かった。本に親しみをもち、多くの児童が進んで本を借りていたので、幅広い読書ができるように蔵書を増やしていく。しかし、調べ学習を本よりもタブレットで行う児童も多く見られたので、端末と紙面の両方を上手に活用できるように指導する必要がある。 ・定期的に俳句作りを行うことで、児童が季語を意識しながら俳句作りを行えるようになった。また、質の高い作品も見られるようになった。今後も季節、行事、コンクールごとに作品作りを継続していく。	・自己評価通り、よく取り組んでいると評価できる。 コロナ禍で中止になっていた読み聞かせを、工夫して可能な形で再開できるといい。	〇引き続き、読書への興味を高める取り組みを、学期毎・学年毎に計画して実施する。感染防止策を講じながら、学校支援本部の協力を得て、お話会を実施していく。 〇語彙力、表現力の向上をねらいとし、計画的に俳句をつくる機会を向け、作品の掲示や発信を行う。